オープンカレッジ

## 大学で「学ぶ」こと、「思う」こと

# 「学ぶ」と「思う」のバランスが重要

名城大学理工学部教授
益田　泰輔

論語に、「学而不思則罔、思而不学則殆（学びて思わざれば則ち罔（くら）く、思いて学ばざれば則ち殆（あやう）し。）」という一節があります。口語訳は「（書物や先生から）学んで（自分で）考えなければ物事の本質は見えず、（自分で）考えるだけで（書物や先生から）学ばなければ（考えが狭くなり）危険である」となります。

私がこれを初めて見たのは中学生か高校生のときでした。当時は「学ぶ」と「思う」の違いがよく理解できませんでした。しかし、大学4年生になって研究を始めて、やっとこの意味が分かりました。何も学ばなければ研究の着想は得られませんし、かといって自分で考えなければ研究が進みません。この論語の一節はややネガティブな語り口ですが、「学ぶ」と「思う」のバランスが非常に重要であることを示しています。

私は、博士課程修了後、国立や民間の研究所を経て約10年前から名城大学の教員として働いています。研究所から大学に移った当初はとても不安でした。社会人研究者は経験に基づいて研究を進められますが、大学では、教員は「教える」必要が、学生は「学ぶ」必要があります。そのため、教育に時間をとられて研究する余裕がなくなり、研究に専念できる研究所と比べて、よい研究成果が得られないのではないかと危惧していました。

しかし、実際には全く異なりました。学生は何も知らない状況から「学ぶ」わけで、大学にいる期間だけでは、教員や社会人研究者のレベルまでとても到達できません。しかし、知識や経験が少ないからこそ常識にとらわれず「思う」ことができます。一方、教員は学生が何も知らない前提で「教える」ため、できるだけ原理・原則に立ち返って説明することになり、そこで本質的な気づきを得る、つまり「思う」ことも多くなるのです。さらに、私立大学では学生数が多いため、研究室に10人の学生がいれば異なる10の研究テーマが必要になります。私の専門は電力系統工学で、以前は大規模系統の運用・制御を中心に研究していましたが、それだけではテーマの数が足りません。よって、小規模な配電系統や電力市場に関する研究も始めるなど、教員としても新しいことを「学ぶ」機会が多くあります。大学は学生だけでなく教員にとっても「学ぶ」と「思う」のバランスを非常に保ちやすいところです。

論語には、「學而時習之、不亦説乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不慍、不亦君子乎。（学びて時に之を習う、亦説（よろこ）ばしからずや。朋（とも）有り、遠方より来る、亦楽しからずや。人知らずして慍（いきど）おらず、亦君子ならずや。）」という一節もあります。この1文目と2文目はとてもポジティブな印象で、私は大好きです。大学は学んでそれを身につける場であり、学びを通して多くの友人も得られます。とても喜ばしいこと、楽しいことではないか、という気持ちで今後も大学で「学ぶ」と「思う」を実践していきたいです。

**ますた・たいすけ**　専門は電力系統工学。東京大学大学院工学系研究科博士後期課程修了。博士（工学）。1982年生まれ。